

登校拒否中学生に対する冒険キャンプの効果

飯田 稔・坂本 昭裕・石川 国広*

The effects of adventure camp on secondary school refusers

Minoru IIDA, Akihiro SAKAMOTO and Kunihiro ISHIKAWA*

The purpose of this study was to assess the effect of camp experience upon school attendance, anxiety, and self-concept of the school refusers who participated in a ten-day camp held in 1987 and 1988. Subjects consisted of 13 (9 males and 4 females) school refusers of 7th through 9th graders and 13 comparative normal children. The adventure camp put great stress upon overnight solo and mountain climbing. The school attendance of school refusers was examined with The School Attendance Questionnaire reported by their mothers after camp. The anxiety of subjects were measured with the State-Trait Anxiety Inventory (STAI), and the STAI was administered four times before, during, immediately after camp, and at ten months after camp. To measure self-concept, the Self Enhancement Scale was administered three times before, immediately after camp, and at ten months after camp.

The following results were obtained:

1. Ten of thirteen school refusers (76.9%) attended the school at ten months after camp.
2. The school refusers showed high state anxiety for first three days in camp with comparison to normal children.
3. No significant difference was found in trait anxiety between school refusers and normal children at ten months after camp.
4. The school refusers tended to enhance self-concept immediately after camp and showed great change in achievement motivation.
5. The normal children had greater improvement in both anxiety and self-concept than the school refusers.

This research was supported by funds from The University of Tsukuba Research Project and Mazda Foundation.

Key words : Camp, School Refuser, School Attendance, Anxiety, Self-concept

目 的

文部省が昭和63年度の調査結果をまとめた『児童生徒の問題行動等の実態と文部省の施策について』によれば、学校嫌いを理由にした登校拒否の子供は、小学校で6,283人、中学校で36,100人、計

42,383人で過去最高になった¹³⁾。特に中学生では前年度に比べ、約4,000人増加し、登校拒否問題が深刻な状況にあることを示している。

登校拒否は、現代のわが国に特に多くみられる特徴的な現象であり、学校という制度・組織の歪みと密接な関係があるといわれてる。本年度文部省では、登校拒否問題の解決の一つの糸口として、

*東京工業大学 Tokyo Institute of Technology.

学校自体のあり方を検討するため「学校不適応対策の調査協力者会議」を発足させた。教育、心理、医学などの多くの専門家の努力にもかかわらず、根本的な解決策が発見されないまま、その波紋がますます広がっていくのが実情といえる。

キャンプ療法の効果についてロジャース¹⁶⁾は、「全治療計画の一部として、キャンプを行なった精神科医や心理士が異口同音にそれがたいのケースにおいて非常に効果的であると述べているのは、おそらく重要なことであろう。」と指摘している。わが国では真仁田・堀内¹⁰⁾が情緒障害児を対象にした2年間のキャンプ療法の研究結果から、「キャンプ療法は、他の集団療法の効果をよりいっそう促進するばかりでなく、他の集団療法では得られない効果をもつと考えられる。」と述べている。

登校拒否児を対象にしたキャンプは児童相談所や各種治療機関で数多く実施されているが、プログラムの内容が日常生活と変わらないことや実施期間が極端に短いことなどから真にキャンプといえるかどうかの批判がある¹¹⁾。

登校拒否児に対するキャンプ療法の効果に関する研究は極めて少なく、その大部分が緘黙、孤立、無気力、チックなどの情緒障害児と一緒に行なわれたもので事例研究が中心である。黒田・村田⁹⁾が家族合同キャンプと合宿訓練について、また竹内²¹⁾は朝日新聞名古屋厚生文化事業団による情緒障害児療育キャンプの3年間の成果を発表している。山梨県では、中央と都留の両相談所が中心となって、昭和49年から情緒障害児合宿治療キャンプ「しらかばキャンプ」を実施、報告している¹⁵⁾。

平井²⁾は、登校拒否児の治療の主たる目的について、「未成熟な自我を発達させることと、それによって、学校ならびに社会で起こるような波風に遭っても、心の際に感ずるつらさを乗り越える気力の養成を図ることが重要になる。」と指摘している。また、詫摩²²⁾は、登校拒否児の性格特性に触れ、「他人に頼らず自分でやっつけようとする力、困難を工夫して乗り越えていこうという意欲が乏しいのです。一言で言えば、野生的なたくましさがないということになりましょう。」と述べている。

困難を乗り越える強い精神力やたくまさを養成することを目的とした野外冒険教育 (Outdoor Adventure Education) がキャンプの最近の動向

の一つとして注目されて多くの研究成果をあげている⁴⁾¹⁸⁾。野外冒険教育は、Kurt Hahn によってイギリスで始められた Outward Bound School の理念と方法を基礎に、自然環境の中で、登山、カヌー、ヨット、スキーなどの野外運動を通じて、強いストレス経験を与え、それを克服する過程で、困難を乗り越える強い精神力を養い、成功体験によって自己意識の向上を図ろうとするものである¹⁾。

本研究は、増加率と難治性の点で現在最も注目されている登校拒否中学生を対象に、10日間の冒険キャンプを中心にしたキャンプ療法を実施することにより、登校拒否児の1) 登校状況、2) 不安、3) 自己概念についてその効果を評価し、登校拒否の問題解決に資することを目的とする。

研究方法

1. キャンプの概要

本研究のキャンプの特色として、次の5点をあげることができる。

- 1) 精神医学、心理学、体育学の専門家が共同してプログラムの計画、展開、及び登校拒否児の指導にあたる。
- 2) キャンププログラムが一般のものとは異なり、自然環境におけるサバイバルや冒険を体験する2泊3日の登山を中心、不安の克服と成功体験の機会を提供するものである。
- 3) 健常児との対人理解、対人関係の向上をはかることにより、早期の学校復帰を促進するため健常児との統合キャンプを行なう。
- 4) 1班6人(登校拒否児2人、健常児4人)からなる男女学年混合グループの小集団に対し、キャンプ経験豊富な筑波大学野外運動専攻大学院生が、キャンプ生活の直接指導にあたる。
- 5) 筑波大学構内(野性の森)での予備キャンプ(1泊2日)、宮城県花山村(花山キャンプ場)での夏季本キャンプ(9泊10日)、キャンプ後の報告会(1日)のほかに、専門家による事前、事後の指導相談を含む総合的、長期的プログラムである。

予備キャンプは、7月中旬の週末を利用して1泊2日の日程で筑波大学構内で行なった。その目的はキャンプの仲間や指導者と親交を深め、キャンプに必要な知識と技術を学び、キャンプに対する不安を取り除くとともに、キャンプへの参加意

3) 夕食と翌日の朝食を、周囲の自然物だけを使って一人で作り、食べる。

4) 翌朝は7時に本部に集合し、登山に出発する。

登山2日目は登山の高度差623m、下降の高度差1,123m、全行程18kmで、所要時間は早い班で9時間30分、故障者の出た遅い班で13時間30分であった。キャンプ場に到着したのは21時40分になっていた。

2. 被験者

幼少年キャンプ研究会主催の冒険キャンプに参加した登校拒否中学生13名(昭和62年—7名, 昭和63年—6名)を拒否群とした。同キャンプに参加した健常児中学生(昭和62年—25名, 昭和63年—18名)の中から、参加年度、性別、学年が拒否

群と一致する健常群を13名抽出した。従って、被験者は、拒否群13名とそれに対照する健常群13名で構成されている。拒否群のプロフィールを表2に示した。

拒否群はキャンプ参加資格として次の条件を満たすもので新聞記事を読んで自主的に応募した。

- 1) 急性短期(1年以内)の登校拒否中学生であること。
- 2) 本人の自由意志により参加を希望する者。
- 3) 調査や資料の収集に関して、本人および両親から協力を得られる者。
- 4) 医師の健康診断によりキャンプ生活に適すると認められた者。

健常群は、幼少年キャンプ研究会のキャンプの

Table 2 拒否群のプロフィールと事後経過

事例 (性別)	キャンプ時		発症時		登校拒否の原因	事後経過(10ヶ月後)
	学	年	学	年		
1 (男)	中	3	中	2 3月	疲れた眠たくて朝起きることができない	9月より再登校し、現在もひき続き登校中。
2 (男)	中	1	小	6 5月	担任への不信任、友人関係	9月より再登校し、現在もひき続き登校中。
3 (男)	中	2	中	1 2月	成績の低下	9月から10月下旬にかけて再登校したが、その後不登校。4月から再登校し、現在も引続き登校中。
4 (男)	中	2	中	1 9月	美術の時間が苦痛先生が嫌い	3月中旬より再登校し、現在もひき続き登校中。
5 (女)	中	1	小	6	担任への不信任、友人関係	5月より親元を離れ、全寮制で登校拒否児対象の公立施設に編入。
6 (男)	中	3	中	3 5月	部活でのいじめ疎外感	不登校のまま中学を卒業し、専門学校に入学したが数日通ったのみで再び登校拒否状態。
7 (男)	中	2	中	1 10月	美術の時間が苦痛、友人関係	キャンプ後も依然として登校拒否状態。
8 (男)	中	1	中	1 4月	学業不振	9月に6日、11月に2日、4月に6日登校。現在不登校。
9 (女)	中	1	中	1 6月	社会科が嫌い皆の前で叱られた	12月より再登校し、現在もひき続き登校中。
10 (男)	中	3	中	2 9月	友達からの仲間はずれ	1月より再登校。中学卒業後、働きながらNHK学園の通信教育受講。
11 (女)	中	3	中	2 5月	男子の嫌がらせ。組替えて友達と離れた	9月より再登校。現在私立高校在学、登校中。
12 (男)	中	2	中	1 9月	不明	9月より登校。現在もひき続き登校中。
13 (女)	中	2	小	6 12月	担任への不信任、友人関係	9月より週の内半分程登校するが、断続的。4月より登校。

募集に応募した者であった。

3. 検査および手続き

1) 登校状況：キャンプ実施後の登校拒否児の登校状況及び行動変化を調べるために、「登校状況調査」を作成し母親を対象に、キャンプ1ヶ月後(9月)、3ヶ月後(11月)、10ヶ月後(6月)の計3回実施した。

2) 不安：被験者の不安を測定するために、Spielberger²⁰⁾らは、State-Trait Anxiety Inventory を作成した。STAI は状態不安と特性不安の2尺度から構成されており、それぞれ20項目4段階評定尺度から成っている。特性不安は不安状態に対する個人の性格傾向を示すものであり、状態不安は個人が経験するストレスによって、その時々その状況により変化する一時的な情緒状態のことである。

本研究では、清水・今栄が日本語版に標準化した「状態-特性不安目録 (STAI)」をキャンプ初日到着直後、ソロ前、キャンプ後、そしてキャンプ10ヶ月後の計4回実施した。キャンプ後の2回は郵送法による。但し、特性不安に関してはソロ前のデータから除外した。

3) 自己概念：梶田⁹⁾は、人生においてその人の行動を規定する自己形成ないし自己実現へと向かう態度や意欲が、児童期から青年期にかけてその基盤が作られるという立場から自己成長性という概念にもとづいて「自己成長性検査」を作成した。

本研究では被験者の自己概念を見るために、「自己成長性検査」を採用し、得点化にあたっては一部修正し、「まったく自分に当てはまる」を5点とし、「まったく自分に当てはまらない」を1点とする5段階評定に修正した。ソロ前を除外してSTAIと同時に3回行なった。

これは、「達成動機」、「努力主義」、「自信と自己受容」、「他者のまなごし意識」の4因子からなっており、4因子の合計得点を全体的自己概念としてとらえ分析した。

4) その他：「ソシオメトリックテスト」、「カウンセラー報告書」、「キャンパー感想文」を補助データ収集のため実施し、結果の考察に利用した。

4. 統計処理

不安と自己概念の変化の比較は、拒否群、健常群の各々については Paired t-Test を、また両群

間については t-Test を用い、拒否群のうち経過良好群と経過不良群との比較は事例が少ないため、Mann-Whitney U Test により検定した。不安と自己概念の相関については Pearson Correlation Coefficient を用いた。

結 果

1. 登校状況

キャンプ後の9月から、キャンプ10ヶ月後の翌年6月までの拒否群の登校状況について、母親が記入した「登校状況調査」にもとづいてまとめたものが表2である。

登校拒否児対象の全寮制公立施設に編入した者を含むと、13人中10人(76.9%)がキャンプ10ヶ月後に登校中で、登校改善群と認められる。再登校開始月は、キャンプ終了後、9月から再登校した者4名、12月1名、1月1名、3月1名、4月2名、5月1名であった。

キャンプ10ヶ月後依然として不登校中の改善不良群は3名で、そのうち1名は9月に6日間、11月に2日間、翌年4月に6日間断続的に登校したが、その後不登校状態のままである。その他の2名は、2学期初日の前夜、登校する準備を自分でしたが結局登校できなかった。

2. 不安

1) 状態不安

拒否群と健常群のキャンプ前、ソロ前、キャンプ後、キャンプ10ヶ月前の各々の状態不安得点を

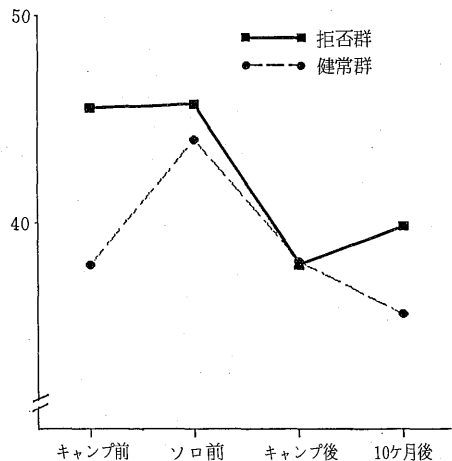


Fig. 1 状態不安得点の変化

Table 3 状態不安得点の比較

群	キャンプ前		ソロ前		キャンプ後		10ヶ月後	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
拒否群	45.5	9.49	45.7	10.86	38.0	10.47	39.9	9.95
健常群	38.0	4.88	44.0	10.89	38.2	12.79	35.6	6.17

図1, 表3に示した。

まず, 拒否群ではキャンプ前とソロ前はほとんど変化はみられないが, キャンプ後状態不安が低下し, 10ヶ月後にはわずかに上昇している。t検定の結果, キャンプ前とキャンプ後 ($t=3.00$, $df=12$, $P<.02$) およびソロ前とキャンプ後 ($t=2.33$, $df=12$, $P<.04$) の各々の間に5%水準で有意差が認められた。従って, キャンプ前からソロ前まで高い不安を持っていたが, キャンプ後に不安が低下し, 解消されたことが理解される。

一方, 健常群では, キャンプ前に比較し, ソロ前に不安が上昇し, キャンプ後にキャンプ前と同じレベルになり, キャンプ10ヶ月後にはさらに低下している。t検定の結果, キャンプ前とソロ前 ($t=1.92$, $df=12$, $P<.08$) の比較で有意性傾向がみられ, ソロ前とキャンプ10ヶ月後の間 ($t=3.08$, $df=12$, $P<.001$) で, 1%水準の有意差が認められた。健常群はソロ活動に対して高い不安を抱いていたことが伺われる。

拒否群と健常群との比較では, キャンプ前の状態不安得点に顕著な差があり, t検定の結果, 5%水準で有意差が認められたが ($t=2.55$, $df=24$, $P<.02$), その他の場面では有意差はなかった。

すなわち, キャンプに参加することに対して, 拒否群は健常群よりも高い不安をもっていたが, ソロ前, キャンプ後, キャンプ10ヶ月後では拒否群と健常群の間に差があるとはいえなかった。

2) 特性不安

拒否群と健常群の各々について, キャンプ前, キャンプ後, キャンプ10ヶ月後の特性不安得点を図2, 表4に示した。

拒否群についてみると, キャンプ前とキャンプ後の特性不安得点はほぼ同じで, 変化は見られず, キャンプ後からキャンプ10ヶ月後にかけて不安の低下がみられたが, t検定の結果有意に達するものではなかった。

つぎに, 健常群に関しては, キャンプ前, キャンプ後, キャンプ10ヶ月後と不安が漸次低下した。

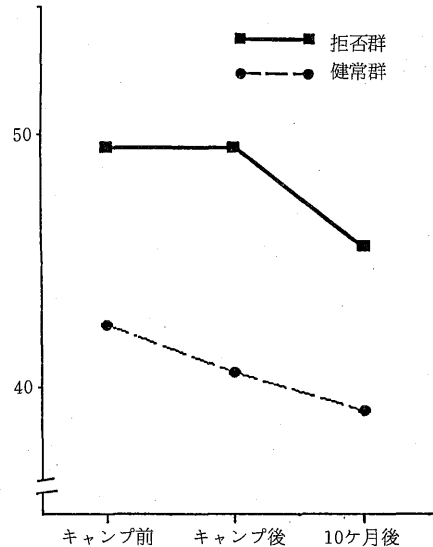


Fig. 2 特性不安得点の変化

Table 4 特性不安得点の比較

群	キャンプ前		キャンプ後		10ヶ月後	
	M	SD	M	SD	M	SD
拒否群	49.5	8.54	49.5	9.96	45.7	10.74
健常群	42.5	6.41	40.6	10.32	39.1	8.80

t検定の結果, キャンプ前とキャンプ10ヶ月後の比較での有意性傾向が認められた ($t=1.86$, $df=12$, $P<.09$)。

拒否群と健常群を比較すると, キャンプ前, キャンプ後, キャンプ10ヶ月後のすべての場面で拒否群の特性不安が健常群より高く, t検定の結果, キャンプ前 ($t=2.36$, $df=24$, $P<.03$) およびキャンプ後 ($t=2.22$, $df=24$, $P<.04$) で5%水準の有意差が認められたが, キャンプ10ヶ月後では有意差は認められなかった。

従って, キャンプ前からキャンプ後にかけては, 拒否群が健常群より特性不安が高かったが, キャンプ10ヶ月後には両群の間に差があるとはいえなかった。

3. 自己概念

キャンプ前, キャンプ後, キャンプ10ヶ月後の自己概念得点および4つの因子得点を, 拒否群と健常群ごとに図3, 表5に示した。

まず拒否群については, キャンプ前からキャン

Table 5 自己概念得点の比較

因子	群	キャンプ前		キャンプ後		10ヶ月後	
		M	SD	M	SD	M	SD
自己概念	拒否群	85.8	13.96	89.7	11.14	88.5	14.55
	健常群	97.6	11.90	103.6	11.38	104.0	11.97
達成動機	拒否群	24.1	7.32	25.8	5.99	24.3	6.22
	健常群	27.0	4.76	28.4	5.25	27.6	6.37
努力主義	拒否群	27.4	5.47	29.4	3.04	27.8	5.49
	健常群	30.9	4.05	32.8	5.08	31.6	5.28
自信と自己受容	拒否群	18.8	4.02	19.2	3.81	20.2	4.42
	健常群	22.6	5.32	23.5	5.14	24.5	5.30
他者のまなざし意識	拒否群	20.5	5.87	19.8	4.66	21.5	3.89
	健常群	22.4	5.68	24.8	5.18	26.1	5.35

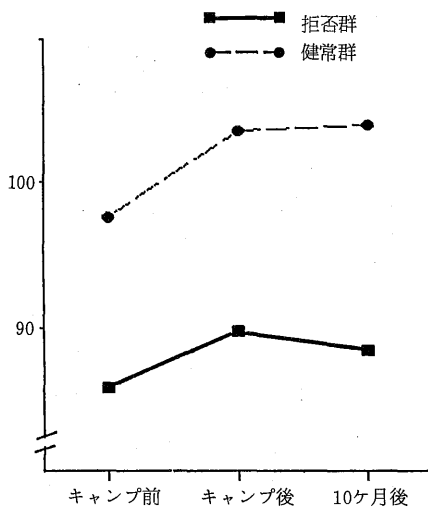


Fig. 3 自己概念得点の変化

ブ後にかけて自己概念得点が向上したが、キャンプ10ヶ月後には僅かな低下がみられた。t検定の結果、キャンプ前に比較し、キャンプ後に有意性傾向が認められたが ($t=1.93, df=12, P<.04$)、キャンプ10ヶ月後まで維持されなかった。

拒否群の4因子別にキャンプ前を基準にt検定を行なったところ、「達成動機」の因子にだけキャンプ後に5%水準で有意差が認められた ($t=2.44, df=12, P<.04$)。

健常群の自己概念得点については、キャンプ前に比べ、キャンプ後に顕著な向上がみられ、キャンプ10ヶ月後も僅かに向上している。t検定の結果、キャンプ前を基準にしてキャンプ後で0.1%水

準 ($t=4.84, df=12, P<.001$)、キャンプ10ヶ月後に5%水準 ($t=2.47, df=12, P<.03$)で有意差が認められた。

因子別にt検定を行なった結果、「努力主義」のキャンプ後に5%水準で有意差が ($t=2.64, df=12, P<.03$)、また「他者のまなざし意識」のキャンプ後に有意性傾向 ($t=1.95, df=12, P<.08$)、およびキャンプ10ヶ月後に1%水準で有意差が認められた。 ($t=3.13, df=12, P<.01$)

拒否群と健常群の比較をt検定した結果、まず自己概念得点は、キャンプ前で5% ($t=2.31, df=24, P<.03$)、キャンプ後1% ($t=3.15, df=24, P<.01$)、キャンプ10ヶ月後1% ($t=2.97, df=24, P<.01$)といずれの場面においても拒否群の自己概念得点が健常群より有意に低かった。

次に因子別に両群を比較してみると、表6より「達成動機」に関してはキャンプ前、キャンプ後、キャンプ10ヶ月後のいずれにおいても有意差は認められなかった。しかしながら、「他者のまなざし意識」のキャンプ前を例外として、「努力主義」、「自信と自己受容」、そして「他者のまなざし意識」の3つの因子のいずれの場面においても、有意性

Table 6 自己概念の因子別検定の結果

因子	キャンプ前	キャンプ後	10ヶ月後
	t	t	t
達成動機	1.21	1.18	1.34
努力主義	1.89*	2.11*	1.78*
自信と自己受容	2.04*	2.43*	2.21*
他者のまなざし意識	.85	2.63*	2.48

* $P<.10$ * $P<.05$

傾向、または5%水準で有意差が認められた。

考 察

キャンプ10ヶ月後の登校状況は、13人中10人が登校しており、登校復帰率は76.9%であった。登校拒否児を対象にしたキャンプの報告は多くあるが、その大部分が一部の事例発表にとどまっております、キャンプによる学校復帰率を評価している研究は少ない。

その中で、「アサヒ情緒障害児療育キャンプ」では、昭和40年～49年の3年間で35名の登校拒否小・中学生を扱い、30名(85.7%)の学校復帰に成功している²¹⁾。また山梨県中央・都留両児童相談所の「しらかばキャンプ」の報告書を総合的にまとめてみると、昭和49年～58年の10年間で40名の登校拒否小・中学生のうち15名(37.5%)が再登校している。これを中学生にだけ限って言えば、確認できるだけで前者が15人中12人(77.8%)、後者が10人中6人(60.0%)であった²²⁾。登校拒否の原因や発症経過、個人的特性、さらにプログラムの内容の違い、再登校の定義と時期の問題などを考えると安易に比較することはできないが、本研究の結果はこれら2つのキャンプと同程度の再登校率を示している。以上の結果からキャンプ体験は登校拒否児の登校状況を改善する効果があったといえよう。この点に関しては、更に他の収容施設や治療法との比較も明らかにする必要がある。

キャンプ後9月から再登校した者は4名で、他の拒否児は再登校までに多くの日数を費やしている。この間アフターケアとして再登校できないものに対して電話や手紙による連絡、担任教師との連絡、10月の報告会、さらに12月にスキー教室等を試みた。登校状況の改善にあたっては、これらのアフターケアの重要性を改めて認識させられた。キャンプ後のアフターケアの内容と方法を長期的視点に立って今後検討する必要がある。

不安については、まず拒否群のキャンプ前の状態不安が高いことがあげられる。これは登校拒否児にとって、キャンプという新しい環境に身をおくことに対する強い不安と抵抗感を表しているものと受けとめられる。

新聞紙上で募集してから半月ほどの間に約80件の問い合わせがあったが、最終的に参加した者は13名であった。親や、担任の教師、児童相談所の関係者が本人に紹介したが、「行きたくない」、「行

きたいが行けない」というのが参加しない理由であった。

参加した13名の被験者のうち、4名がキャンプ前夜に「行きたくない」と言い出した。電話で本人を説得し、2名はキャンプ当日の出発時間に所定の場所に集合したが、残る2名は集合場所に来れず、再び説得後、夜キャンプ場に到着した。本研究の被験者から除いた1名(中1男子)は、それでもキャンプに参加できなかった。

キャンプ開始の数日間は、他のキャンパーになじめなかったり、キャンプ生活に適応できずに、孤立、ホームシック、食欲不振、頭痛、吐き気、発熱など登校拒否児特有の心理的、身体的不適応症状が担当キャンプカウンセラーと医師によって頻繁に報告されている。

ソロ前の状態不安は、拒否群(M=45.7, SD=10.86)と健常群(M=44.0, SD=10.89)との間に差はみられなかった。この値は飯田⁹⁾らが行った同年齢中学生に対するソロ前の状態不安(M=40.5, SD=9.51)より高かったが、井村の結果⁶⁾(M=44.9, SD=11.26)とほぼ一致している。

ソロを含む登山については、拒否群、健常群とも「生きて帰れるか心配だ。」「何か悪い予感がする。」など全員が感想文の中で不安を訴えており、両群間に大きな差はなかったものと思われる。ソロは参加者全員にとってストレス源となっていたことは明らかである。

ソロ前の状態不安がそれ程高くなっていないことから、拒否群にとっては、キャンプに対するストレスはソロ前には解消され、新たに健常群と同レベルのソロに対する不安が出現したものと推測される。

キャンプ後の状態不安は拒否群、健常群とも同レベルで、拒否群のキャンプとソロに対するストレスは解消され、キャンプ後は健常児と同じくらい安定した情緒状態になっている。

拒否群の特性不安は、キャンプ後まで変化がなかったが、キャンプ10ヶ月後には、それまで顕著な開きがあった健常群との間に、有意差がない程度にまで低下した。これは、キャンプでのストレスを克服した経験と、登校状況が改善されたことが影響しているものと考えられる。

拒否群の自己概念はキャンプ直後に向上の傾向がみられた。自己概念は課題に対する成功、失敗

体験と、課題達成についての周囲の評価のよし悪しが影響を及ぼして発達する。拒否群のキャンプ前とソロ前の状態不安が高いことは前述したが、拒否群にとってはこの2つの不安状態を克服し、キャンプを無事にやり遂げたという成功体験が得られたこと、さらにキャンプの仲間、指導者、家族からそれを強化されたことが自己概念の向上に影響を及ぼしたものと考えられる。

因子別では「達成動機」の向上が認められた。「達成動機」は、「自分の能力を最大限に伸ばせるよう、いろいろなことをやってみよう」、「他の人にはやれないようなことをやりとげたい」といった自己概念を支える意欲に関わっている。キャンプにおけるストレス体験の克服によって、新しい体験や困難な課題に対する意欲や積極性が高まったと言えよう。事実、ある拒否児が感想文で、「他の人にはなかなか体験できないこともやってのけた、ということに自信をもってこれからもガンバリたいと思います。」と記している。子供の意欲を育てる指導が、現在の登校拒否問題解決の大きな課題であるといわれている²¹⁷⁾が、キャンプはそのための有効な一方法であると思われる。健常群においては、キャンプ後、キャンプ10ヶ月後でも自己概念が向上し、飯田⁹⁾ら、井村⁹⁾の研究結果と一致している。

キャンプに参加することやキャンプでの冒険的活動に対する不安やストレスの克服と成功体験が、自己概念の向上に影響を及ぼし、その結果として登校状況に改善がみられたものと考えられる。

拒否群にとっても冒険キャンプは自己概念の向上に効果があったが、健常群により大きな効果が見られた。両群間の効果のギャップをどのようにして埋めることができるかが今後の課題である。

自己概念と特性不安の相関をみると、キャンプ前で $r = -.76$ 、キャンプ後で $r = -.63$ 、キャンプ10ヶ月後で $r = -.77$ とかなり高い相関があることが示された。このことから、不安の解消が自己概念の向上に密接に関わっていることが推察される。

拒否群のうち、経過改善群10名、不良群3名であったが、この両群について不安、自己概念についてU検定を行なった結果、有意差はまったく見出されなかった。もし不良群に共通の要素があるとすれば、それはキャンプにおいて新しい人間関係を形成・確立することができなかったことが

あげられる。キャンプ8日目に好きな仲間と一緒に同じテントで泊まる交歓宿泊があった。友人関係を把握するために、「あなたは誰と同じテントに泊まりたいですか？最も一緒になりたい人から順番に3名の氏名を書きなさい。」という指示のもとにソシオメトリックテストを実施した。その結果、経過不良群のうち1名は選択、被選択なしの完全孤立、1名は同じ班の男子を選択したが被選択なし、残る1名は誰でもよいと書いて特定の氏名をあげず、被選択はなかった。改善群では、2名以上の選択があり、そのうち相互選択が必ず存在した。

キャンプは小集団生活を通じて新しい人間関係をつくり、人間関係を拡大することが目標の一つであるが、不良群の3人についてはこの目標が達成されなかったものと思われる。

登校拒否児と健常時との統合キャンプ運営上の問題点の一つとして、体力と運動能力がある。登校拒否児は体育が嫌いで活発な身体運動を好まないという指摘がある³¹⁴⁾。その上、登校拒否のため家に閉じ込めりがちとなり、運動をする機会が少なく体力や運動能力がさらに低下してしまうという悪循環に陥っている。

2回の統合キャンプ、特にソロを含む登山において体力や運動能力の違いが予想以上に大きいことが明らかにされた。13人中少なくとも8人は健常児といっしょに登山をすることは不可能のように思われた。ペースについてゆくことができず、疲労ですぐにしゃがみこんだり、何でもない山道で転倒したり、急斜面を一人で登ることができない場面がしばしばあった。途中で挫折した者、稜線で1時間意識不明で倒れていた者が各1名ずつ出て、予定の日程を変更せざるを得ない結果になった。

ある程度の体力や運動能力は、少なくとも歩行に関しては、人間関係の成立と発展のベースになっている¹¹⁾。キャンプに参加した登校拒否児が体力と運動能力の低さを認識し、キャンプ後毎朝歩いたり、ジョギングをしたり、運動に目を向けるようになったことは大きな成果であった。

それと同時に、統合キャンプの難しさは、拒否児と健常児の体力差を考慮しながら、いかにして両者の接点をつくり、両方が満足できる活動を与えるかにある。体力と運動能力の問題は、登校拒否の問題解決に欠かすことのできない要素であり、

体育関係者への新たな警鐘として受け止めること
必要がある。

結 論

登校拒否中学生に対して、健常児と一緒に自然
環境の中で、冒険的活動を中心とする10日間の
キャンプを実施することにより、登校拒否児の1)
登校状況、2) 不安、3) 自己概念に及ぼす効果
を評価した。被験者数が少ないという限界はある
が、次の結論を得た。

- 1) キャンプ10ヶ月後の登校状況は、13人中10人
(76.9%) が再登校しており、登校状況に改善
がみられた。
 - 2) 登校拒否児はキャンプに参加することに強い
不安をもち、この状態はキャンプ開始後も2
～3日続いた。
 - 3) 登校拒否児の性格傾向としての不安がキャン
プ10ヶ月後に低下し、健常児との差がせばまっ
た。
 - 4) キャンプに対する不安やストレスを克服する
ことによって、登校拒否児の自己概念が向上す
る傾向がみられた。特に達成動機に関する自己
概念の向上が顕著であった。
 - 5) 冒険キャンプ体験は、不安の低下と自己概念
向上の両側面で、登校拒否児よりも健常児によ
り、大きな効果がみられた。
- 以上のことから、登校拒否児に対する冒険キャン
プ体験は、登校拒否問題解決の有効な治療法
の一つとして考えられる。本研究で扱った登校
拒否児は13名であったが、今後被験者数を増や
すことによって、今回の結果をさらに検証し、
一般化する必要がある。

引 用 文 献

- 1) Fletcher, B., *The Challenge of Outward Bound*,
Heinemann: London, 1971.
- 2) 平井信義, School phobia あるいは登校拒否の諸
類型と原因的考察並びに治療について, 臨床心理
学の進歩 (日本臨床心理学会編), 誠信書房, pp.
80-99, 1966.
- 3) 平井信義, 登校拒否児, 新曜社, 1978.
- 4) Iida, M., Adventure-oriented programs —A
review of research. In B. van der Smissen (ed.),
Research camping and environmental educa-
tion. The Pennsylvania State University, pp.

219-241, 1975.

- 5) 飯田稔, 井村仁, van der Smissen, B., *The impact
of short-term adventure camp on self-concept
and anxiety in Japanese early adolescents*, 筑波
大学体育科学系紀要, 9, 91-101, 1986.
- 6) 井村仁, アドベンチャー・プログラム経験が中・
高校生の自己概念に及ぼす影響, 筑波大学体育科
学系紀要, 5, 59-70, 1982.
- 7) 石川憲彦, 人間を矯正しようとする治療, ひと,
17(3), 13-19, 1989.
- 8) 梶田亅一, 自己意識の心理学, 東京大学出版会,
1980.
- 9) 黒田健次, 村田正次, 情緒障害児の実態とその予
後に関する研究—情緒障害児の家族合同キャンプ
および合宿治療を中心に—, 臨床心理学研究,
9(3), 155-167, 1970.
- 10) 真仁田昭, 堀内聰, 情緒障害児のキャンプ療法に
関する研究, 教育相談研究, 13, 13-32, 1973.
- 11) 真仁田昭, 登校拒否問題の分析, 文部時報, 3,
22-27, 1989.
- 12) 真野由美子, 尾崎裕, 大貫典夫, 江口美代子, 情
緒障害児治療キャンプ, 児童相談—研究と報告,
4, 50-61, 1982.
- 13) 文部省初等中等教育局中学校課, 児童生徒の問題
行動等の実態と文部省の施策について, 1989.
- 14) 永瀬純三, 登校拒否児に見る授業の好き嫌い, 現
代のエスプリ, 139, 187-194, 1979.
- 15) 中島利夫, 情緒障害児キャンプの試み(1), 保健の
科学, 24(1), 54-58, 1982.
- 16) ロジャース, C.R., 小野修訳, 問題児の治療, 岩崎
学術出版社, pp. 256-283, 1966.
- 17) 坂本昇一, 学校不適応の本質と指導のあり方, 文
部時報, 3, 4-7, 1989.
- 18) Shore, A., *Outward Bound: A referense volume*.
Greenwich, Conn., Outward Bound Inc., 1977.
- 19) 清水秀美, 今柴国晴, STATE-TRAIT ANXI-
ETY INVENTORY の標準化, 愛知教育大学教
育工学センター教育資料, 1977.
- 20) Spielberg, C.D., Edward, C.D., Lushine, R.E.,
*STAI Manual for the State-Trait Anxiety
Inventory ("Self-Evaluation Questionnaire")*.
California, Consulting Psychologists Press,
Inc., 1970.
- 21) 竹内清, 学校嫌いはキャンプで治る, 黎明書房,
1975.
- 22) 詫摩武俊・稲村浩編, 登校拒否, 有斐閣, 1980.
- 23) 山梨県中央・都留児童相談所, 業務概要, 昭和49
年度～昭和58年度.